

# 地域の農業と新規参入者

## —— 京都市左京区大原地区の事例 ——

小林 舞

キーワード：新規参入者、有機農業、環境、近郊農業、小規模農業、自給的農業、専業、兼業

この論文では、京都市左京区大原地区の6世帯の新規参入者に焦点を当てる。「新規参入者」は、1980年代を初め、農業の「新しい担い手」として期待された。しかし、彼らのもつ「農業」に対する肯定的で新しい見方が、これからの「農業」を考えるきっかけとなり、さらには、環境論と結びついて形での農業再生の起爆剤となることが期待されている。

この論文で取り上げる新規参入者の場合、6世帯という数は、ひとつの地域にほぼ同時に参入した新規参入者の数としてはかなり大きい。それぞれの世帯は、異なる状況の中で、異なる戦略で、農的な暮らしを維持している。農地の長期にわたる使用や、地域に十分受け入れてもらうことがむずかしい点などは、全国の若い新規参入者たちの場合と共通している。そうした制限や困難は、生活上の困難であるだけではなく、特に、有機的な農業の基礎となる土づくりへの努力にとって障壁となっている。彼らがひとつのユニットとして活動できた点は、連帯の力を発揮する上でも、互いに刺激し合っていく上でも力があつたし、新規参入者として認知してもらう上でも有効だった。2008年に開設された「里の駅」という一定の販路があつたことも幸いだったし、何より、京都の中心部に近いという地理的条件も重要な要素だった。

こうした若い農業者たちの成功に学ぶことを通して、大原全体にも、有機野菜産地としての可能性が生み出されてきている。その点では、大原のケースは、新規参入者の肯定的な役割を示す事例になっている。しかし、「有機」という点をいかに理解するか、その点には注意を向けなければならない。流通の中で、しばしば「有機」ということは、販売戦略としてだけ使われている。

農業のあり方は、その土地その土地にあつたものでなければならない。参入者自身、大原に固有の条件の中で「成り立つ」農業を模索しているはずだ。大原に見合った農業の形という意味での在来小規模農業の伝統に学ぶところがあるだろう。「プロの農家」、理想化された「専業農家」のイメージが、そうした農業についての理解に映し出されてくる。この論文では、生産のための生活ではなく、生活を支える手段としての農業として農業を捉えることが、「本当の意味で環境に親しい」大原の農業を維持していくために必要なのだということを議論したい。

地域に合った農業でなければ結局のところ持続可能でないことは、狭い意味での農法についてだけでなく、農業を取り囲む生活のあり方、地域との関わりについてもいえる。彼ら若い農業者をこれまで支え、これから支えていくのは、収入を得るための生産についての能力だけではなく、相互に支え合う、地域社会とそれを越えた生態系を含む環境の中で生きていく能力であるだろう。